

〔研究論文〕

## 説明的文章の難易度を決める要因(5)

-読者の自己効力感尺度の作成に向けた理論検討-

Factors Determining Difficulty in Informational Texts (5)  
Theoretical Study for Creating a Self-Efficacy Scale for Readers

青山 之典  
Yukinori AOYAMA

福岡教育大学 教職実践ユニット

(2022 年 1 月 31 日受理)

本研究では、説明的文章の読みに関する読者の自己効力感尺度の作成に向けて、自己効力感の概念について検討した。その結果、自己効力感という概念が Bandura の社会的学習理論に支えられており、読者・読む行為・テキストの相互作用としての読む行為についても、その対象と考えてよいことが明らかとなった。また、説明的文章の読みという特定の状況においては、自己効力感とは読む行為をうまく成し遂げることができるという確信であることが明らかとなった。この検討結果を踏まえ、説明的文章の難易度を捉えることに活かす自己効力感尺度の作成方法の検討を行った。

**キーワード：**説明的文章、難易度、自己効力感、尺度

### 1 はじめに

#### 1.1 研究の経緯と問題意識

小・中学校を見通した説明的文章の読解指導カリキュラムの開発を進める上で、教材文の構造的な難易度を明らかにすることが必要である。

青山 (2017, 2018, 2019, 2021) では、読みの基盤的能力である「論理的認識力」をもとに、テキストに内在する難易度を決める要因を析出してきた。その過程では、次のような研究を進めてきた。1) ミクロの視点から捉えた説明的文章の構造を支える要素「基本的な結束性」の導出とマクロの視点から捉えた説明的文章の「論理の型」の導出、2) 小学校国語教科書、中学校国語教科書、高等学校国語総合教科書に所収された説明的文章の構造図作成方法の確立、3) 説明的文章の構造の複雑さとワーキングメモリの関係の検討、4) 筆者のものの見方とテキストベース・状況モデル構築の関係の検討、である。

一連の過程では主として説明的文章テキストを

対象とした分析と考察を進めてきた。その結果、説明的文章において重要とされている「論理」という概念がテキストの構造に留まらず、筆者のものの見方をも要因として、形成されていることが明らかになってきた。

ただ、これらの考察においては、説明的文章テキストの構造的な特徴や、筆者のものの見方に影響を受け、想定された読者がどのように読むかが検討されたに留まり、現実の読者がどのように読むかは検討されていない。説明的文章の読解指導カリキュラムの開発を進める上では、現実の読者が説明的文章テキストのさまざまな特徴にどのように影響を受けるかを検討しなければならない。

#### 1.2 問題の所在

読者が説明的文章テキストに何らかの影響を受けて易しさあるいは難しさを感じるかどうかは、テキストへの関与の程度に関わることが予想される。一般的に国語科の授業においては三読法といった、一定の時間をかけて繰り返し読むことが多

い。Kintsu(1994)は読みの過程で、テキストの意味論的、修辞論的な特徴から導かれる「テキストベース」と、事前にもっている知識との統合によって形成される「状況モデル」というテキストベースよりも深いレベルの理解の存在を指摘している。つまり、読みの過程の初期にはテキストベース形成を中心にした説明的文章テキストへの関与によって、読者は自らの認識内容と照らし合わせながら解釈を進めていくだろうし、学習過程が進んでいけば状況モデル形成を中心とした解釈が進められるだろう。例えば、説明的文章テキストに内在する構造的な特徴や筆者のものの見方といったものは、読みの初期の段階においてはあまり強く捉えられていない傾向にあり、読み深めるにつれて強く捉えられていく傾向にある。このような傾向についても考慮した調査の方法について、検討する必要がある。

ところで、読む過程において、実際には、読者はどのようなことを難しいと感じるのであろうか。Kintsu(1994)の指摘から導かれるのは、テキストベース形成に関わる難しさと状況モデル形成に関わる難しさの存在である。まずは、両者に関わる解釈の具体を視点にする必要があると考えられる。

また、そもそも読者が感じている読みにおける難しさについても測定可能にする方法を検討する必要がある。Bandura(1977)は社会的学習理論を示し、人間の行動を決定する要因を明らかにした。その中で、自己効力感(Self-efficacy)という概念を示している。祐宗ほか(2019)によれば、自己効力感とは、「ある状況において必要な行動を効果的に遂行できるという確信」である。つまり、本研究で捉えようとしている読者が感じている読みにおける難しさとは、読みにおける自己効力感のありように関係があると考えてよいだろう。

ちなみに自己効力感を測るための尺度は様々なものが開発され、検討されている。例えば、坂野・東條(1986)は日常生活のさまざまな状況における個人の一般性自己効力感の強さを測定する尺度を作成している。成田ほか(1995)はShererほか(1982)が作成した特性的自己効力感の強さを測定する尺度を検討している。伊藤(1996)はPintrich & De Groot(1990)の尺度をもとに日本語訳したものを使得って学業達成場面における自己効力感、原因帰属、学習方略の関係を考察している。その他にも様々な環境における自己効力感のありようを測定するための尺度が開発・検討されている。自己効力感という概念の蓋然性の高さを示しているものとも考える。ただし、特定の説明的文章テキストの難易

度測定を目的とした、読みに関する自己効力感尺度は管見の限り見当たらない。

読みにおける自己効力感のありようを説明的文章の難易度測定に活かそうとするとき、まずは読みの過程において、テキストベースと状況モデルを形成する自己効力感を測定するための尺度を開発する必要がある。その前提として、まず開発のための基盤を検討する必要がある。

### 1.3 研究の目的と方法

読みの過程でテキストベースと状況モデルを形成する自己効力感を測定するための要点を明らかにする。

そのために、読みの過程に関する先行研究および自己効力感尺度の開発に関する先行研究の検討を通して、説明的文章の読みに関する自己効力感尺度の作成方法について明らかにする。

## 2 先行研究の検討

### 2.1 自己効力感の概念を支える社会的学習理論の検討

Bandura(1977)のいう自己効力感とはどのような概念だろうか。そのことについて考える前提として、まずは彼の社会的学習理論について検討してみたい。

Bandura(1977)は「心理的機能は個人的、行動的、そして環境的な決定因の絶え間ない相互作用に基づいている。」(p.213)と述べ、個人・行動・環境の相互作用を重視している。この考え方は読むという行為とどのように関係するだろうか。

Kintsu(1994)が指摘するように読むという行為は文章理解に関する心理的機能である。テキストベースを形成し、さらに状況モデルを形成する過程は、テキストという環境に影響を受けつつ、認識を再構成し続ける行為である。このとき、読者一人一人は環境からの影響を一方的に受けて解釈を生み出すわけではない。そのことは、同じ本を読んでも人によって解釈が異なることから明らかである。逆に、テキストがなければ読者は解釈を生み出すことはできない。読むという行為自体が不可能だからである。つまり、読むという行為は読者・読む行為・テキストの相互作用である。

このことは説明的文章の読みにおいても同様に考えることができる。青山(2015)で明らかにしているように、説明的文章の読みにおいても、相互作用的に機能する論理的認識力によって、読者一人

一人は認識を再構成し続ける。やはり読者・読む行為・テキストの相互作用になっている。

つまり説明的文章の読みも含め、読むという行為一般に対して、社会的学習理論からアプローチすることには可能性があると考えられる。

## 2.2 説明的文章の難易度を測るために自己効力感の概念は活用できるか

Bandura (1977) は「変容は認知過程に媒介されるが、一方、認知過程は、遂行行為が成功するという経験により引き起こされ、変えられる」(p. 89)と述べ、個人・行動・環境の相互作用における認知過程の重要性について指摘している。読者一人一人の読みにおける変容も、具体的にはテキストベース形成・状況モデル形成といった認識の再構成過程であり、Bandura (1977) が指摘する通りである。特に、ここで注目したいのは認知過程が成功経験によって引き起こされ、変えられるという点である。この点について、Bandura (1977) は「結果予期」と「可能予期」という概念を示して解説している。

結果予期とは「ある行動がある結果に導くだろうという個人の推測」(p. 89)と定義され、可能予期とは「その結果を生ずるのに必要な行動をうまく行うことができる、という確信」(p. 89)と定義されている。これら2つの概念のうち、特に可能予期の概念に注目して、次のように述べる。「可能の確信の程度が、困難な状況へ立ち向かうか否かを決定する。人は、自分が対処できないと思う脅威的状况を恐れ、避ける。しかし、うまく処理できると判断した時は、確信をもって行動する。」(p90)「脅威的状况を恐れ、避ける」という行動は、説明的文章テキストに向き合ったときについていえば、難しいテキストだという判断による読みの躊躇であろうし、「うまく処理できると判断した時は、確信をもって行動する」のは、意欲的で自信に満ちた読みの姿であろう。

ちなみに、ここで、Bandura (1977) が「可能予期」と呼んでいるのが「自己効力感」である。祐宗ほか(2019)に指摘があるように、自己効力感(self-efficacy)の訳語については「自己可能感」、「自己確信」、「自信」などがあり、定訳がない状況にある(p. 45)。

これらのことから、説明的文章の難易度と読者の自己効力感とは強い関係があると考えられる。Bandura (1977) は困難な状況に対する行動に自己効力感が影響を与えると指摘しているが、両者は相互作用的事であることから、読者一人一人の自己

効力感のありようが、説明的文章テキストに対して読者一人一人の感じる難易度を示しているとも考えられる。

したがって、説明的文章の難易度を測るために自己効力感の概念は活用できると考えてよいだろう。もちろん読者一人一人がそう感じる理由は、一人一人異なるものと考えられることは指摘しておきたい。

## 2.3 自己効力感の主要な要因についての検討

Bandura (1977) は自己効力感の主要な要因として次の4つを挙げる。遂行行動の達成、代理的经验、言語的説得、情動的喚起である。それぞれについて次のように解説されている。

### 2.3.1 遂行行動の達成

Bandura (1977) は、遂行行動の達成経験が自己効力感をもっとも持続させる要因と述べている。逆に、失敗経験を繰り返すと自己効力感は弱まるというが、繰り返し成功して強固な自己効力感をもつ者は、たまに失敗してもあまり否定的な影響を受けなくなるという。このことは非常に困難な状況も努力し続けることで克服できるという態度を形成することにつながり、結果的に自己効力感の持続性はさらに強化されると指摘している。

このことから、説明的文章の読みの経験のありようが自己効力感の持続性(強度)に関係するものと考えられる。つまり読者一人一人の説明的文章の読みに関するさまざまな経験のありようを捉えることが、読者一人一人の自己効力感の強度を捉えることにつながるものと考えられる。そして、説明的文章の難易度に関する感じ方を捉える手がかかりになると考えられる。

### 2.3.2 代理的经验

Bandura (1977) は、代理的经验から生ずる予期も多いと指摘している。自己効力感を強化する上でモデリングが力を発揮するという指摘である。具体的には、モデルが課題となる状況を克服している様子を観察することで、自らも克服できるのではないかと自己効力感を強めるということである。

さらに、Bandura (1977) はモデルの実態も自己効力感の強度に関係すると指摘している。例えば、課題の克服に慣れたモデルよりも懸命な努力によって課題を克服していくモデルを観察したときの方が、自己効力感の強化されやすい傾向にあると述べている。また、一人のモデルが成功しているの



を見たときよりも幾人かのモデルが成功しているのを見たときの方が自己効力感は強化されやすいと述べているし、観察者と類似したところのあるモデルを観察することも、自己効力感を強化するのに効果的であると述べている。

これらの傾向については説明的文章の読みの経験においても同様のことが考えられる。例えば、共に学ぶクラスメイトの多くがうまくやり遂げている様子を見れば、観察者自身にもできそうな気がしてくるだろうし、観察者と同じような苦手意識をもっているクラスメイトがうまくやり遂げている様子を見れば、観察者自身もできそうな気がしてくるだろう。子どものことばで言えば「みんなできている」とか「みんなやっている」ということであろうから、そのような表現によって代理的経験を尋ねることで、自己効力感のありようを推測することは可能かもしれない。

さらにいえば、観察者自身にうまくやり遂げた経験がなくとも、所属する学習集団においてたくさんのクラスメイトがうまくやり遂げている姿を観察しているとすれば、「クラスのみんなや先生といっしょならできる」という思いを抱きやすいだろう。これは、ヴィゴツキー (1935) のいう発達の最近接領域の存在を示唆する。したがって、調査アンケートに「国語の授業」という場が明記され、遂行行動の達成と代理的経験のありようを尋ねるとともに、発達の最近接領域の存在 (クラスのみんなや先生といっしょならできるかどうか) についても尋ねることで、国語科授業における説明的文章の難易度の感じ方を捉える確かな手がかりを得ることができるものと考えられる。

### 2.3.3 言語的説得

言語的説得は手軽であるために広く使われていると指摘されている。それは説得的な暗示であり、以前うまくいかなかったことを、次はうまくやり遂げられると信じ込まされるというものである。ただ、言語的説得で形成された自己効力感は弱く、すぐに消失してしまうとも述べられている。

このことから、言語的説得によって自己効力感を形成しているかどうかを調べることは一つの手がかりにはなるかもしれないが、説明的文章の難易度を推測する目的に照らすと、あまり確かな手がかりを与えてくれるとは考えられない。

### 2.3.4 情動的喚起

情動的喚起とは不安やストレスを感じている状態であり、そのような状態であると心理的に冷静

な時よりも自己効力感が弱くなる傾向にあると述べられている。

つまり、説明的文章の読みの学習において不安やストレスを感じたことが多ければ、説明的文章の読みに対する自己効力感も低くなる傾向にあるということである。そして、この場合は説明的文章のありように関わらず、自己効力感が低くなる傾向にあるということであり、説明的文章個々の難易度に対する感じ方を捉える手がかりにはなりにくいだろう。したがって、情動的喚起の経験についても尋ねる調査項目を設定しておけば、不安やストレスを感じた経験の多少を捉えることができ、そうした経験の多い読者の回答については、説明的文章の難易度に対する感じ方を捉える手がかりにはなりにくいと判断することに役立つだろう。

## 2.4 自己効力感の次元についての検討

自己効力感は次元によって変容すると Bandura (1977) は述べる。取りあげられているのは、「重要度」、「般化の程度」、「強度」である。これら3つの次元を総合し、「行動変容は、予期の変容量に密接に対応している。可能予期が強いほど、脅威に満ちた課題をうまく処理できる可能性が高くなる」(p. 95) と述べており、要因とともに次元についても捉え、総合的に自己効力感を捉えることが大切であると考えているようである。

以下、それぞれの次元のありようによってどのように自己効力感が変容するのかを整理し、検討しておく。

なお、それぞれの次元の後ろにカッコ書きしているのは祐宗ほか (2019) におけるそれぞれの次元の名称である。

### 2.4.1 重要度 (レベル)

Bandura (1977) は「重要度」の次元の例として、課題の難しさを取り上げている。「比較的簡単な課題」、「中程度に難しい課題」、「最も努力を要する課題」というように難しさという視点から課題を並べ示して尋ねたとき、やり遂げることができると判断するかどうかは人によって異なると述べている。つまり、単に課題の内容だけを捉えるだけでは十分でないことを指摘しているのである。そして、後者の方がより強い自己効力感であると考えているようである。

したがって、調査アンケートなどで自己効力感の要因を捉えるとともに、その重要度、例えばどれくらい難しいときにもやり遂げられると判断しているかを捉えることが必要であると考えられる。

### 2.4.2 般化の程度（一般性）

「重要度」と同様に「般化の程度」という次元についても人によって判断が異なることを Bandura (1977) は指摘している。具体的には、「ごく狭い制御予期」を形成する経験があれば、「特定の治療場面を超えて、もっと一般的な可能感」を形成する経験もあると述べている。「般化の程度」が高いほど、自己効力感を感じる場面が広く深いことから、より強い自己効力感であると考えられるだろう。

### 2.4.3 強度（確信度）

「強度」についても次元の一つとして取り上げられている。Bandura (1977) はここでも「弱い統御予期は不成功体験で簡単に消去してしまうのに対し、強い予期をもつ人は、断念させるような経験にもかかわらず、いつまでも努力し続ける」(p. 95) と述べている。この次元は要因について述べている部分でも繰り返し取り上げられてきたものであり、自己効力感の強度について捉えておくことは重要であると考えられる。

## 2.5 自己効力感の測定方法に関する先行研究の検討

### 2.5.1 祐宗ほか (2019) の場合

祐宗ほか (2019) は 3 つの次元上で自己効力感を測定する手続きについて述べている (pp. 39-40)。以下、要約を示す。

#### ① レベルの評定

a) 課題となる行動についての状況提示（可能な範囲で何かに接触させる、ある状況に身を置くなど）を行う。

b) レベルごとに容易な行動から困難な行動までを示し、どのレベルまで可能か、可能なレベルに○印をつけさせる。

#### ② 強度（確信度）の評定

a) ○印のついた各項目について 10 ポイント間隔で 100 点までの数値をつけさせる。(100 は完全に 100% 可能と確信するとき、10 は一応できると評定したものの、極めて自信がないというとき)

b) レベルと強度を組み合わせた表を各被験者ごと、各課題ごとに仕立てる。

#### ③ 一般性の評定

a) 対象を変え、状況要因を変えた場合の自己効力のレベルと強度（確信度）を設定させる。

それぞれの次元を手がかりにした自己効力感の評定の仕方は参考になる。ただし、強度の評定で示している方法は細かすぎて、ポイントの違いが確

かな手がかりになるかどうかには課題があると考えられる。

### 2.5.2 坂野ら (1986) の場合

坂野ら (1986) は MMPI および Y-G 性格検査に含まれる行動遂行場面を参考にしながら、一般性の高い自己効力感を測定する尺度を開発している。祐宗ほか (2019) は特定の場面における自己効力感を測定した後、対象や状況を変えて、一般性を高める方法を示しているが、坂野ら (1986) は一般性の高い対象や状況を盛り込んだ問いを立てることを目標にして、16 項目の問いを設定している。

表 1 坂野ら (1986) の設定した尺度項目

1. 何か仕事をするときは、自信を持ってやるほうである。
2. 過去に犯した失敗や嫌な経験を思い出して、暗い気持ちになることがよくある。
3. 友人より優れた能力がある。
4. 仕事を終えた後、失敗したと感じることのほうが多い。
5. 人と比べて心配性なほうである。
6. 何かを決めるとき、迷わずに決定するほうである。
7. 何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い。
8. ひっこみじあんなほうだと思う。
9. 人より記憶力がよいほうである。
10. 結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでゆくほうだと思う。
11. どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれないうことがよくある。
12. 友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある。
13. どんなことでも積極的にこなすほうである。
14. 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。
15. 積極的に活動するのは、苦手なほうである。
16. 世の中に貢献できる力があると思う。

レベルごとに容易なものから困難なものへと配列しているようには見えず、それぞれの問いの中にレベルや強度を盛り込んで設定しているようである。回答もそれぞれの項目に対して、Yes か No で答えるようになっている。

本研究の場合、ある特定の説明的文章の読みを成し遂げることができるかどうかを捉えることを目標としているため、一般性の評定を行うかどうかは一考の余地がある。

また、読みにおける活動をどの程度やり遂げられると確信しているか、そのレベルや強度を捉えることを目指すため、問いの中にレベルや強度を盛り込んで設定することには一考の余地がある。

### 2.5.3 富永 (2006) の場合

富永 (2006) は高校生の進路選択自己効力について測定することを目的にした尺度を作成している。先行研究を手がかりにして、進路選択自己効力の測定でもっとも頻繁に用いられる尺度 CDMSE を批判的に検討し、改善していくことが目指されている。

CDMSE には 5 つの領域「自己認識」、「情報収集」、「計画立案」、「目標選択」、「課題解決」にそれぞれ 10 項目 (全 50 項目) が設定されている。富永 (2006) は領域ごとにそれぞれ項目を設定するとともに、

高校教員やスクールカウンセラーが教育現場で使えることを意図して、全16項目に絞り込んでいる。そして、信頼性の検討を行い、先行研究に示された他の尺度と比較しても高い信頼性が認められたと述べている。

設定された項目は次のとおりである (p. 367)。

表2 富永 (2006) の設定した尺度項目

1. 自分が興味を持つ職業をいくつか言うこと
2. 自分の理想の職業を思い浮かべる
3. 入試や就職の情報を、インターネットなどを使って集めること
4. 将来の仕事に役立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること
5. 自分の科・コースでの勉強がわからなかった場合、それを理解しようと努力すること
6. 現在考えているいくつかの職業の中から、一つの職業を選ぶこと
7. 先生や家族以外の年上の知り合いに、進路のことを相談すること
8. 自分が将来どのような生活をしたいか分かったこと
9. 機会があれば、自分が興味を持っている分野で働いている人と話すこと
10. 自分が就きたい職業の仕事内容を知っていること
11. 親や友人が勧める進路であっても、自分の適性や能力にあっていないと感じれば、断ること
12. 自分の趣味にある職業を選ぶこと
13. 5年先の目標を持ち、それにしたがって計画を立てること
14. 大学や専門学校、就職の情報を、自分で集めること
15. 自分の才能をいかせようと思う職業分野をいくつかあげること
16. 先生や家族と自分の進路について話し合うこと

強度を回答させる際には、各項目に対して「自信がある」、「どちらかといえば自信がある」、「どちらかといえば自信がない」、「自信がない」の4段階で評価させている。項目の配列についてはレベルが意識されているように見えるが、回答のさせ方については祐宗ほか (2019) とは方法が異なっている。

全体的に具体的な項目が設定されており、本研究で目指す方向に近いと考える。また、項目の設定にあたって CDMSE の領域など、進路選択自己効力尺度に関する先行研究を参照しつつ、現場で使えるものを設定しようとしている点は参考になる。

また、強度を回答させるときに4件法を使っていることについても参考になる。

## 2.6 説明的文章の難易度を測るための自己効力感尺度の開発に向けて

### 2.6.1 項目の内容についての検討

項目の内容については説明的文章の読みの過程における活動を項目として設定したい。富永 (2006) が進路選択に関するさまざまな活動を項目として設定しているように、特定の状況における活動をやり遂げる自信があるかどうかを問いたい。

説明的文章の読みの活動として日本国内で広く採用されていると考えられるのは、学習指導要領に示されている指導事項等である。これらを参考にして、説明的文章の読みの学習における活動内容を項目として設定したい。ただし、森田 (2003) や青山 (2013) が指摘しているように、学習指導要領にはカリキュラム構造上の課題がある。したが

って、先行研究に示された論理的認識力に関わる活動内容も付け加えることを考えたい。

また、読みの過程に沿って項目を配列していくことを考えたい。自己効力感尺度の項目は易しい行動から難しい行動へ配列されていくことが多い。読みの過程はテキストベース形成から状況モデル形成へと、手がかりとする要素を増やし、関係づけを複雑にしながらか解を再構成していく過程である。その意味で、読みの過程は易しい思考から難しい思考へと高まっていく過程であるといえる。したがって、読みの過程を意識した項目の配列を具体化していきたい。

### 2.6.2 回答のさせ方についての検討

強度の回答のさせ方についても、富永 (2006) の方法をとりたい。

祐宗ほか (2019) に示された方法では小学生対象の調査で信頼性の確保が難しいと考えられる。全ての項目について4件法によって強度 (確信度) を捉えていくことができるようにすれば、小学生から高校生までを対象とすることができると考える。

## 3 考察のまとめ

### 3.1 成果

自己効力感という概念について、その概要を整理し、検討することで、説明的文章の難易度を測定するための理論的基盤を得ることができた。特に、Bandura (1977) が示す社会的学習理論が述べる個人・行動・環境の相互作用という考え方は、読む行為を成し遂げるときの読者一人一人の能力や経験、学習集団のありようなどの相互作用にも適用できると考える。

このことから、読む行為に関する自己効力感を測定することは、読者個々の読む行為について予期することに寄与するであろう。そして、それらの予期は読みの対象となる説明的文章の難易度を示すことになるだろう。

さらに、説明的文章を読む行為に関する自己効力感を測定するための尺度を作成する方法についても検討することができた。先行研究に示された様々な尺度開発方法について検討することは、Bandura (1977) が示した自己効力感の概念を具体化するプロセスでもあり、自己効力感を形成するときの個人・行動・環境の相互作用についても考えることができた。その結果、説明的文章の読みという特定の状況に自己効力感の概念をどのように適



用していくかを考えることができた。

### 3.2 課題

本研究は説明的文章の難易度を測定することを目指して、説明的文章を読む行為に関する自己効力感尺度について検討するものであった。この研究を基盤にして、実際に調査問題を作成し、予備調査を行う必要がある。その上で、結果を分析し、説明的文章の難易度を測定する調査問題としての妥当性、信頼性について検討する必要がある。

## 4 謝辞

本研究にあたり、小泉令三名誉教授（福岡教育大学大学院）から貴重な示唆をいただいた。また、本研究は JSPS 科研費 19K02763（研究代表者：青山之典）および JSPS 科研費 21K02456（研究代表者：幸坂健太郎）の助成を受けた研究の一部である。

## 引用・参考文献

- 青山之典 2013 Strand 概念の導入による読解カリキュラム改善の可能性-要点・要旨把握指導に焦点をあてて- 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部, 62, 99-107
- 青山之典 2015 論理的認識力を高めるための説明的文章の読みに関する小学校国語科スパイラルカリキュラムの開発 広島大学大学院学位論文
- 青山之典 2017 説明的文章の難易度を決める要因(1)-マクロとミクロの視点から捉えられる構造に焦点をあてて- 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 7, 41-50
- 青山之典 2018 説明的文章の難易度を決める要因(2)-根拠の構造に焦点をあてて- 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 8, 9-16
- 青山之典 2019 説明的文章の難易度を決める要因(3)-小学校と中学校の国語教科書を比較して- 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 9, 1-14
- 青山之典 2021 説明的文章の難易度を決める要因(4)-高等学校国語総合の教材文に焦点をあてて- 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 11, 1-14
- Bandura, A. 1977 *Social Learning Theory*, Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall. (原野広太郎監訳 1979 社会的学習理論-人間理解と教育の基礎- 金子書房)
- Bandura, A. 1995 *Self-efficacy in changing societies*, Cambridge University Press. (本明寛・野口京子監訳 1997 激動社会の中の自己効力 金子書房)
- 伊藤崇達 1996 学業達成場面における自己効力感, 原因帰属, 学習方略の関係 教育心理学研究, 44(3), 340-349
- Kintsch, W. 1994 Text Comprehension, Memory, and Learning. *American Psychologist*, 49(4), 294-303

- 森田信義 1984 認識主体を育てる説明的文章の指導 溪水社.
- 森田信義 2003 説明的文章指導論の史的研究IX-『小学校学習指導要領』の考察を中心に- 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部, 52, 115-124
- 中澤潤・大野木裕明・伊藤秀子・坂野雄二・鎌原雅彦 1988 社会的学習理論から社会的認知理論へ- Bandura 理論の新展開をめぐる最近の動向- 心理学評論, 31(2), 229-251
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の検討-生涯発達の利用の可能性を探る- 教育心理学研究, 43(3), 306-314
- Pintrich, P. R., & De Groot, E. V. 1990 Motivational and self-regulated learning components of classroom academic performance *Journal of Educational Psychology*, 82, 33-40
- 坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, 12(1), 73-82
- Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W. 1982 The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, 51, 663-671
- 富永美佐子 2006 高校生のための進路選択自己効力尺度の作成-内容的妥当性・併存的妥当性の検討から- 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 54(2), 355-376
- ヴィゴツキー 1935 教授・学習過程における子どもの知的発達 国立学術教育出版. (土井捷三・神谷栄司 訳 2003 「発達の最近接領域」の理論-教授・学習過程における子どもの発達 三学出版.)
- 祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊(編) 2019 新装版 社会的学習理論の新展開 金子書房.

